

わずか3年の製紙社

吉井源太は、紙製造において同業者の協力が大変重要だと考えていた。それを実践した跡を見てみよう。

明治十三（一八八〇）年には、伊野町の戸長だった吉本楠美らと協力して、伊野に製紙社というものを設立した。

「社」とつけられているが、土佐紙の改良と販路拡大を目的としていて、同業組合のようなものだった。

メンバーは二百四十四名。当初、吉本楠美が社長、源太が副社長となったが、同十五（一八八二）年には源太が社長となる。しかし、翌年には解散となった。履歴書には、この解散に至る理由がかなり詳しく記述されている。

この製紙社を設立すると

きに県から勸業資金を受けていた。その金額は数千円だった。現代のお金にして、数千万円以上にはなっただろう。この資金をもとに、かねて提唱していた粗製濫造の矯正や販路の拡大に努めた。この結果、維新の混乱時に落ちてしまった土佐紙の名声を挽回することができた。

ところがその後、県内で乳幼児の養育をサポートしようという育児会が設立されることになり、県庁からこの勸業資金を返還せよと言ってきた。その期日が急なものであったために、持ち合わせの紙を売り出しのようにして処分せざるを得ず、大変な損失を出した。

さらにはその後、物価下落が起り、損失はますます増

大したということである。

この育児会について、その設立の経緯が矢野龍巖著「中山秀雄」の中に詳しく紹介されている。中山秀雄は、嘉永二（一八四九）年

に香我美郡岩村郷金地村の郷大庄屋の家に生まれた。

高知県議会の第四代、第八代議長を務め、高知育児会の創設や土佐紙業の発展に貢献した人。晩年は旧藩林

政史の研究に没頭して、国史館に没頭して、有林下戻訴訟に執念を燃やし、大正十（一九二一）年に東京で病没した。

育児会を作ろうと、中山が中心となって明治初期から活動していたところ、明治十二、三年ごろ、京都にある浄土真宗の本願寺が高知県に別院を開設するという計画を立てた。

この時本願寺に頼み、付属育児会を作ってもらった。高知県庁より五万円の「貸下金」を受けるとして、設立の計画を立てた。この計画から撤退することになる。育児会については、中山が仲間とともに新しく高知育児会を組織し、中島町の自宅を仮事務所とした。改めて県から三万円の貸下げ許可を受けたとある。

源太は、明治の初期から多数の同業者をまとめる組織を作り、紙業改善などのための方策を実施しようとした。しかし社会の中の制度もまだ整わないので、なかなかその努力が実らなかったことがよくわかる。（京大大学院研修員、京都府在住）



楮原料（いの町神谷、典具帖紙の共同作業場）